

ニガウリの接ぎ木栽培

杉下弘之・白木己歳・中村憲一郎¹⁾・富永 寛
(宮崎県総合農業試験場・¹⁾中部農業改良普及センター)

Hiroyuki SUGISHITA, Mitoshi SHIRAKI, Kenichirou NAKAMURA and Hiroshi TOMINAGA :
Grafted Culture of Bitter Gourd

臭化メチル全廃が目前に迫っており、ニガウリもほかの野菜類と同じようにこの影響を受ける。現在、臭化メチル無き後の野菜圃場の土壌病害対策が、代替え薬剤の検討を中心に進んでいる。しかし、食品の安全性への関心が高まっている現状では、薬剤による土壌病害対策はできるだけ避けたいところである。そこで、ニガウリの接ぎ木栽培を検討した。本報では、台木の有望品種と、増収に視点を置いた接木の効果を述べる。

1. 材料および方法

1) 有望台木の選定

1997年の実験：当场育成のニガウリ‘宮崎こいみどり’を穂木として、‘新土佐1号’、‘クロダネ’、‘つやか’ (以上・カボチャ)、『鬼台’ (スイカ) を供試して収量を調査した。実験の作型は促成栽培で、10月3日に播種、呼び接ぎを経て11月10日に定植し、4月30日まで収穫した。栽植密度や施肥等の管理は、宮崎県における当該作型の慣行法に準じた。このことは以下の実験でも同様である。

1998年の実験：当场育成系のニガウリ‘試交2号’を穂木として、1997年の実験で好成績を示した‘新土佐1号’と‘鬼台’を供試して収量を調査した。実験の作型は半促成栽培で、2月9日に播種、呼び接ぎを経て3月22日に定植し、6月21日まで収穫した。

2) 接木ニガウリの茎葉、収量、果実の形状等

2000年の実験：当场育成系のニガウリ‘農試C’を穂木として、前述の実験の結果有望と認められた‘新土佐1号’を台木とする栽培を行い、茎葉の状態、収量の推移、果実の大きさ等を調査した。実験の作型は普通栽培

で、2000年5月1日に播種、断根片葉切断接ぎを経て5月23日に定植し、8月29日まで収穫した。

2. 結果および考察

1) 有望台木の選定

1997年の実験における接ぎ木各区の収量は、自根に比べ‘つやか’は同程度のレベルであったが、ほかの3品種は多収を示した。ただし3品種の多収の幅には差があり、‘クロダネ’が9%の増収であったのに対し、‘新土佐1号’と‘鬼台’は17~19%の多収を示した。1997年の実験では、‘新土佐1号’が前年に引き続き多収であったが、‘鬼台’は、自根に比べ総収量で10%、上物収量で16%減収した (第1表)。

2) 接木ニガウリの茎葉、収量、果実の形状等

自根区と比べた接ぎ木区の茎葉は、栽培期間の大部分において小柄に推移し、収穫打ち切り時の茎葉重は約30%軽かった。しかし、このことは生育が劣る状態とは認められず、むしろ蔓の節が詰まった充実した草姿と観察された。収量は、接ぎ木区が明らかに多く、自根区に比べ総収量で20%、上物収量で49%の多収を示した。また、接ぎ木区は果実の肥大が早く、収穫果が自根区より大きかった (第2表)。

以上のように、‘新土佐1号’を台木とするニガウリの接ぎ木栽培は、省農薬を図りながら増収も得られる栽培法として有望である。この‘新土佐1号’ (地域によっては‘新土佐’) を台木とする接木栽培は、すでに宮崎県内産地の蔓割れ病常発圃場に取り入れられて顕著な効果を上げており、次第に導入面積が拡大している。

第1表 台木品種が収量に及ぼす効果 (数字は自根区での値を100とした指数)

台木品種	1997年の実験			1998年の実験		
	総収穫果数	総収量	上物収量	総収穫果数	総収量	上物収量
新土佐1号	119	118	118	115	127	114
クロダネ	111	109	109	—	—	—
つやか	104	102	99	—	—	—
鬼台	115	137	119	91	90	84

第2表 2000年の実験における接ぎ木の効果

区名	茎葉重 (g)			総収量 (a 当たり)			上物収量 (a 当たり)			1果重 (g)
	主枝	側枝	合計	果数	重量 (kg)	比	果数	重量 (kg)	比	
自根区	360	1,008	1,368	1,415	244	100	533	126	100	237
接ぎ木区	258	716	974	1,500	292	120	725	188	149	259

注) 1果重は上物果の平均